

『よしおとまさる君の運動会』



よしおは、^{しょうがっこう いちねんせい}小学校の一年生。といっても、このお話を、^{はなし いま ごじゅうねん むかし はなし}今から五十年も昔のお話なので
す。よしおが通っていた学校は、^{かよ がっこう まいあさ しゅうだんどうこう}毎朝、^{しゅうだんどうこう きんじょ こ}集団登校をしていました。集団登校とは、^{あつ}近所の子どもたちが集まって、^{はん}班をつかって、^{がっこう い}みんなでいっしょに学校に行くことです。

この^{しゅうだんどうこう}集団登校には、^{ふた}きびしい「おきて」があったのです。それは二つ。^{がっこう せんせい}学校の先生からきびしく^い言いつけられていたきまりです。

一つは、「^{ひと ぜんいん}全員がそろって登校すること」と、もう一つは、「^{ひと とうこうじこく}登校時刻におくれないこと」でした。^{かんたん おも}簡単そうに思えますが、^{とうこうはん いちねんせい ろくねんせい こ}登校班には一年生から六年生までの子どもたちがいますので、^{とき}時には、^{しゅうごうばしょ こ}集合場所におくれてくる子もいます。

この班の中で、一番小さいよしおは、^{ある}歩くスピードがおそくて、^{うし にねんせい こ}後ろにいる二年生の子につつかねながら、^{こぼし とうこう}小走りになって登校したものでした。それでも^{とうこうじこく}登校時刻ぎりぎりになってあせってしま^いうことも^{なんど}何度かありました。

今から、^{いま ごじゅうねん むかし}五十年も昔のことですから、^{がっこう せんせい}学校の先生も、とてもきびしくて、^{とうこうしゅうりょう じこく}登校終了の時刻になると、^{おとこ せんせい も}可愛い男の先生がぼうを持って校門の前に立ち、^{こうもん まえ た}おくれた班は問答無用でしかられます。^{はん もんどうむよう}言いわけは一切聞いてくれません。とくに^{ろくねんせい はんちよう}六年生の班長さんにはめっぽうきびしく、^は「歯をくいしばれ！」なんてこともめずらしくはありませんでした。

うんどうかい ちか あき ひ あさ
運動会も近づいたある秋の日の朝。

ある うんどうかい
よしおは、歩きながら運動会の

れんしゅう ひつよう わす
練習に必要なハチマキを忘れてきた

き
ことに気づきました。

よっ としうえ あね こ
そこで、四つ年上の姉のゆう子に、

ある はな
このことを歩きながらこっそり話しました。

はんぶんいじょう ある いま ひ かえ ま あ
「もう半分以上も歩いてきているから、今から引き返したら間に合わないよ。あきらめな！」

よそう へんじ いちねんせい たんにん せんせい うえ
と、予想どおりの返事でした。でも一年生の担任の先生も、とてもきびしかったのです。その上、

わす
よしおは、きのうもハチマキを忘れていたのです。

きょう わす れんしゅう あいだ うんどうじょう た ねが
「今日もハチマキを忘れたら、練習の間、ずっと運動場に立たされるよ。お願いだから

はんちょう い
班長さんに言ってよ。」

こ ひっし ねが
と、よしおは、ゆう子に必死になってお願いしました。

こ はんちょう と かえ はな はんちょう
ゆう子はしかたなく班長さんに、これからハチマキを取りに帰ると話しました。すると班長さんは、

がっこう
「えーっ、うそだろ！そんなことしてたら学校におくれるじゃないか。ぜったいにダメ！ダメ！」

よそう へんじ
と、これまた予想どおりの返事でした。

き なだ
それを聞いて、よしおは、とうとう泣き出してしまいました。



「さあ、行くぞ！ハチマキを忘れたやつが悪いんだ！」

と、班長さんが言った時です。班長さんと

同じ六年生のまさる君が、

「待ってやろうよ。一年生なんだし、かわいそうじゃないか。」

と、言ってくれたのです。班長さんは、もちろん

んダメと言いはりました。そして、班のみんなに

向かって「待ってもいい者は手を挙げる。」と、

聞きました。その時、手を挙げたのは、まさる

君ただ一人でした。

「多数決で決定！どうしてもというなら、まさ

るだけ待ってやれば？お前が、班長のおれの言うことを聞かずに勝手なことをしたと、先生に

は言うからな！」

そう言って、班長さんは、まさる君をにらみつけ、みんなを引き連れて歩き始めました。

まさる君は、

「さあ、お兄ちゃんが家まで行ってやるから、もう泣くな。」

と、よしおの手を引っぱりました。こうして、二人は、集団登校の列からはなれ、学校とは逆

の方向に歩きだしたのです。

まさる君は、太っていて運動がとても苦手でした。運動会の練習の時にも、

「こらーっ！さっさと動け！まさるだけおくれてるぞ！」

と、いつも先生にどなられていました。だから、きっと今日も、校門でこっぴどくしかられると、

よしおは思っていました。



まさる^{くん}とよしおが、校門^{こうもん}の前^{まえ}に着^ついた時^{とき}には、もう朝^{あさ}の会^{かい}が始^{はじ}まっていた。どこかの教室^{きょうしつ}から、朝^{あさ}の歌声^{うたごえ}が聞^きこえてきました。

「こらーっ！今^{いま}、何時^{なんじ}かわかってんのか！何^{なに}、勝手^{かって}なことしてるんだ！何^{なん}で二人^{ふたり}だけおくれたんだ！」

校門^{こうもん}の前^{まえ}に立^たっていた先生^{せんせい}にどなられ、二人^{ふたり}は、卒業^{そつぎょう}式^{しき}の時^{とき}のようなしせいで身動き^{みうご}一つできまませんでした。

しかし、先生^{せんせい}が、何^{なに}を聞^きいてもまさる^{くん}は、

「明日^{あした}からは、ぜったいにおくれません。ごめんなさい。」

をくり返^{かえ}すばかりでした。

よしおは、学校^{がっこう}に着^つく少し前^{すこ}から、こわくてしくしく泣^ないていたのです

が、自分^{じぶん}の忘れ物^{わす}の^{もの}ことを

一切^{いっさい}言^いわないまさる^{くん}のす

がたを見^みて、とても悲^{かな}しく

なり、運動場^{うんどうじょう}にひびき渡^{わた}

るような声^{こえ}をあげてワーツ

と泣^なきました。

その声^{こえ}が、あまりにも

おお大き^{おお}かったのでしょうか。

先生^{せんせい}も、それ以上^{いじょう}はしか

らず、

「早^{はや}く教室^{きょうしつ}に入^{はい}りなさい。」

と、言^いって通^{とお}してください

ました。





そんなことがあって数日すうじつが過ぎました。今日は、運動会うんどうかいの日ひです。

よしおは、六年生ろくねんせいの徒競走ときょうそうの様子ようすをじっとテントの中なかから見みていました。

スタートラインたに立たっているのは、登校班とうこうはんの班長はんちょうさんとまさる君くん。あと
は知らないお兄ちゃんにいばかりでした。

よしおは、まさる君くんに一番いちばんになってもらいたいと思おもっていました。あの日ひ
いらい、運動うんどうが得意とくいで、勉強べんきょうもできて、友だちからも人気にんきのある班長はんちょうさん
ではなく、あまり運動うんどうや勉強べんきょうが得意とくいではない、まさる君くんのことが好きすきに
なっていました。

パーンとピストルが鳴って、いっせいにスタートしました。

まだ、二十メートルも走っていないのに、まさる君は、他の子たちにずいぶん引きはなされてしまいました。

「まさる君、がんばれ！まさる君、負けるな！」

と、よしおは一生けんめいに応援しました。

応援しても、応援しても、まさる君は、どんどん引きはなされてしまいます。

やがて、班長さんがトップでテープを切りました。続いて、他の子たちも、どんどんゴールしていきます。

でも、まさる君だけは、まだ歯を食いしばって走っています。よしおは、

「がんばれ！まさる君、がんばれ！」

「がんばれ！まさる君、がんばれ！」

「がんばれ！まさる君、がんばれ！」

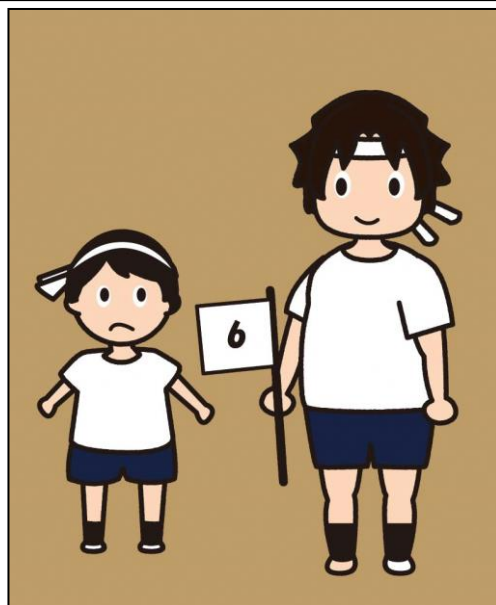
と、応援し続けました。



まさる君がゴールした時に、班長さんは「1」と書かれた旗を笑顔でふっていました。

まさる君には「6」と書かれた旗が渡されました。

よしおは、退場してくるまさる君を待って、こう言いました。



「まさる君。何で負けたの？一生けんめい頑張ったのに、何で一番じゃないんだよ！」

よしおは、くやしくてたまらなかったのです。すると、まさる君は、大きく肩で息をしながら、

「よしお君。そんなにおこるなよ。お兄ちゃんは走るのがおそいんだよ。毎年ビリだ。これで六回目のビリだよ。」

と笑って言いました。そして、

「よしお君が頑張ってくれた声、よく聞こえたよ。ぼくは、走るのがおそいから、よく聞こえるんだ。」

と言うと、まさる君は、六年生のテントの方へ歩いて行ってしまいました。



よしおは、まさる君の後ろを走って追いかけました。

運動会は、午前中の競技を終えて、昼休みになっていました。 (おしまい)